

本校における外国人学生の 受入れとその適応について

榎 本 英 彦

本校では過去7年間にわたり、当市のロータリークラブの依頼により、アメリカ、カナダ及びオーストラリアの高校生（又は高校卒業生）を受け入れて来た。又今後も受け入れを行なう予定である。それは次の如くである。

A	オーストラリア男子	昭和47年2月	48年1月
B	アメリカ女子	48年9月	49年7月
C	カナダ女子	50年9月	51年7月
D	オーストラリア女子	53年2月	54年1月（現在在学中）
E	アメリカ女子	53年9月	54年7月（ ” ）

最初クラブから依頼があった時は、教官の間で賛否両論があった。反対の理由は要約すれば、このような経験は初めてであるための不安と、外国人に対する何ともし難い疑いの気持ちであった。

賛成の理由は次の如くであった。1. 今後の日本の繁栄は諸外国との良い関係に依存する事が大きいので、そのため一人でも多くの日本の理解者を外国に得る事が必要である。2. 本校の生徒の多くが将来は海外で、又は外国との関係の深い職場で働くので、高校の時代から外国人と共に生活して外国人との協調性を身につける一助となり得る事。3. 現代の日本は海外に学ぶだけでなく、外国人を日本において教育するだけの大国である事。

この理由は今後ますます強調されねばならない事である。今日先進国と言われる国々では学校、大学の在學生や教官の何パーセントかが外国人である事は普通の事であろうが、日本は今日ようやくこの国際流動性の第一段階に達したと言ってよい。

以上の賛成論は理想論としては至極もったもな議論である。しかしこのような外国人学生の受け入れは過去に例もなく、又基準とすべき資料のような物はないため、すべて暗中模索的立案と、試行錯誤によらなければならない。又すべての外国語教師がその外国語を読む事は出来ても流暢に話す事は必ずしも出来ないのはどの国でもあり得る事である。まして日本の英語教師の大部分は話すための特別の訓練は受けていないのであるから、外国人学生の受け入れは英語科教員に多くの精神的負担をかけるものである事は現実考慮に入れなければならない事である。本校においても受け入れ決定の第一の前提は英語科教官の同意であった。しかし最も重要なのは外国人留学生の受け入れは英語科教師だけの仕事ではなく学校全体としての仕事であり、さらにこれが発展して国家の仕事としてとり上げられねばならないという事である。

第一回留学生のA（本文中では本校への留学生は上記A、B…で表わす）は来日前に日本に強い関心を持って居たが日本語はほんの片言を話すだけであった。しかし1年の在学の終り頃には日本語を自由に話すばかりでなく、新聞等の記事の中で易しいものは多少の助けがあれば読めるまでになった。

我が国では自由とは勝手気ままに振舞う事、又そのように振舞い、それを許容する事が欧米流の民主主義である、と言う観念がかなり一般的ようである。現代の日本の青少年の躰が乱れているのはこの欧米の影響であり、そこへ現実の欧米人が学校に入って来る事は混乱を倍加

するばかりだ、という何となしの懸念があるとも言える。

日本と同様に欧米にも各種の人間がいる事は事実である。しかし一般的に言って欧米では幼少時からの家庭での躾がしっかりと行なわれ、上流の家庭になる程社会的責任の自覚をともなった自製の訓練が行きとどいていると言う事は多くの人々によって指摘される事実である。

この点でAは本校において欧米人の躾に対する認識をすっかり改めたと言ってよい。自制心が強く、礼義正しくかつ積極的に努力し、困難に会うとねばり強く我慢し、工夫して立ち直す少年であったため、すべての先生、生徒からその人物を高く評価され、これが本校における外国人学生受け入れを永続的なものにするきっかけとなった。つまり留学生受け入れが本校にとってマイナスになる要素はなく、かえってプラスになる面が多い、という事が認識された、と言ってよい。

第2回のBはアメリカ人であるという事で再び特別の注目を浴びた。戦後の自制心と責任感の薄くなった日本の子供達を「アメリカの影響」と単純に信じ込む傾向があり、又、日本人のアメリカ観はハリウッド映画に負う所大であって、一般にアメリカ人は浪費的でぜい沢、との考えがある。しかし再びBを通じて本校におけるアメリカ人観は改まったと言ってよく、このAとBを通じ本校の多くの人々は欧米人の方が日本の現代の青少年より躾がしっかりしている。礼義正しい、自主的でしっかりしている、との考えを得たように思われる。

或る物が自分にとって疎遠であればある程、人はその物について総括した考えを抱きがちなものであって、我が国における欧米観、欧米人観にも同じ事が言えよう。しかし過去7年間にわずかではあるが4人の外国人に接して来た結果、欧米人にも日本の生徒と同じく個性がある事、個人的好みや関心、傾向に違いのある事が実感として認識された。これを考えて見れば至極当然の事である。しかしこれは現実の人間に接して初めて実感として認識されるのであって、この事は欧米人の躾に対する再認識と共に本校における留学生受け入れの大きな成果の一つであったと言ってよい。

又第一回の留学生の場合は皆から珍しがられ、その一挙手一投足が話題になった。しかし回をかさねるにつれ次第に留学生の存在は皆の特別の注目をひく事が少なくなって行った。これは皆の関心が薄れたという事ではなく、留学生が他の日本の生徒とあまり区別して意識されないようになった（もしくはそれに近い状態になった）と言う事を意味している。

日本は比較的他国と隔絶した存在を続けて来たため、外国人というものが日本ではとかく特別な目で見られがちであるが同じレベルの個人として扱われるようになるのが理想的な状態と言えよう。本校においてこの理想的状態が達成されているとは言えないまでも、留学生の存在を特別強く意識しないが、個人としてその要求に応えるべく教育を行なっている、という状態に一歩でも近づき得た事は、成果の一つに加えてよいと思われる。

日本の学生が英語国に留学する場合と異なり、英語国から日本への留学生は日本語の授業を通じて学科それ自体を学習する事は一年の在学期間では困難な場合が多い。従って学習の中心は日本語及び日本の文化の学習、更に高校生活と日本の生活の直接の体験という事になる。

これらの学生を受け入れて指導する場合には個々の学生の来日の動機、来日以前における日本語の学習度が充分に考慮に入れられねばならない。しかしその学習度にはそれぞれ違いはあるが、本校の定期試験の時期に達成度のテストを行ない学習の刺激としている。個々の学生について見ると次の通りの違いがある。

- A 日本に強い関心を持って居り、日本語をマスターしたいと思っていた。しかし来日前には日本語を殆ど知らなかった。
- B, C 第二希望としての日本にまわされた。学習意欲は従って受動的であり、来日前に日本語は全く知らなかった。(しかし二人共帰国時には簡単な漢字かなまじり文が書けるようになった。)
- D オーストラリアでハイスクール(日本の中学、高校を一つにしたものに当たる)で5年間日本語を学習し、大学への資格試験の日本語のテストに合格した。授業中にも日本の現状についての説明を聞いていたばかりでなく、短期間日本に旅行に来た事がある。

上に述べたように、Dはオーストラリアでは日本に住んだ事のあるオーストラリア人の先生に日本語の授業を受け、その授業中には日本の生活や文化について色々教わり、授業中には日本のお茶(抹茶でなく普通のお茶)を日本風に飲む事さえしたと言う。この学生を通じて知り得る事は、オーストラリアでの日本語の授業が日本の英語の授業より、もっと多面的で文化の面にも力点が置れている事、読み書きと同時に話す事が重視され、教室内では英語での説明の他に、先生と生徒が日本語で話し合う機会が作られている事である。来日当時にはこの学生の日本語は決して充分でなく、多くの間違いを含んでいた。しかし、5年間英語をやった日本の学生には見られない積極性で日本語を話し、それは充分に日常の役に立ち得るものであった。

外国人留学生の日本での適応の難易は、本人の性格にもよるが、日本人学生からの近づき方の内容と度合による所が大きいと思われる。日本人学生が外国人学生を疎遠にする原因の最も大きなものは言語の壁であって、この点初めから日本語を或る程度話したDの場合には最初から比較的親しい自然な関係が生れ、以前のどの留学生よりも適応がスムーズに行っていると思われる。

しかし多くの場合留学生は日本語を殆ど知らないばかりか、日本の事も日本人の性格についてもあまり知らない状態でやって来る。未知の事について自国流に判断したり、うまく解釈ができなかったりすると、いわゆるカルチュラルショックを起す。又、日本人学生からの近づきが最初は物珍しさからだったが次第に言語の壁から意志疎通すべき事が疎通されないまゝと言う事が重なって来ると、お互に何となく疎遠感が生じて来る事となる。

このような事は100%避ける事は困難であるが、できるだけスムーズな適応が出来るように配慮工夫してやる事が望ましい。それには第一に、日本人生徒に予め好ましい受け入れの態度について話しておくのがよいと思われる。受け入れの意義、将来彼等が外国人との関係の中に立たねばならない事等と同時に、生徒は留学生に出来るだけ日本語を教えるようにし、間違っても笑ったりしないで正しい言い方を教える事、日英両語の混用でもよいから相手の便宜になるように意志の伝達をはかるように努める事等である。

以下留学生の適応についていろいろな条件について考えて見たい。

1. 英文の学校案内、留学生のルール、バスの乗り方、1年の予定表等を用意しておいて渡す。(136～139ページ参照) 又クラス生徒名をローマ字でタイプして渡す。留学生のルールは従来の経験にもとづいて今年7月にまとめたものである。
2. 日本語は最初ひらがな書きで覚え、習得した漢字を次第にその中に入れて行く。この場合基本的な教育漢字を主体とし、書き順を重視する。外国人の中にはしばしば書き順を無

視する人がいるが、これでは応用発展がきかなくなる。

3. 日本語における丁寧さの規準は外国人にとって大変難しい。外国人として話して不自然に聞こえないやゝ丁寧な表現を主体とし、女性の場合はもちろん女性語を中心とする。
4. 英語の挨拶語に対応する表現(おはよう、ありがとう等)と同時に「すみません」「どうも」と言ったような日本人が頻繁に用いる表現の意味と心理を教える。適応の上手な外国人はこれらの言葉をうまく使うものである。又「ごくろうさん」「先日はありがとうございました」と言った日本独得の表現について教える事、自分はそれを使わないにしても日本人の人間関係を理解する一助となる事がある。又、使う事によって日本人社会からより親しみを以って受け入れられるようになる。
5. 日本語を習い始める外国人には、外国語をそのまま日本語に対応させる事ができると考える人が多いし、又日本語を教える日本人にもこの錯覚を持つ人がいる。これが漠然とした不適応感の原因になる事がある。you をすべて「あなた」と置き換えて使ったとしよう。「あなた」は日本語の多くの二人称代名詞の中で丁寧なものであると教えらる。しかし目上の人に「あなたは…」と言った外国人は相手から一種の不快の反応を得て自分が不快がられた原因がわからずそれが何か自分自身にあるのではないかと理由のわからない不安におそわれる。つまり日本語では目上の人や親に対して「あなた」と言った代名詞を使うのは失礼で、それに代わる各種の表現がある事を教えねばならない。又受動の表現は日本語と英語とでその心理的背景がいちぢるしく異っている等も留学生は指摘されてはじめて知る事実である。

又留学生はファーストネームで呼ばれる事が多いが、日本における「呼び捨て」という事の意味と同時に、家族間での名前の呼び方の慣用を教えるといふ。鈴木孝夫氏の「ことばと文化」(岩波新書)にはこの事情が法則的に述べられている。

6. 上の例でも述べたように、これが正しいやり方だと思ってやった事が思わしくない反応を受けると、その理由がつかめず、これが度かきなると不適応、つまりカルチュラルショックの原因となる。従ってこれを防ぐ最良の方法は、異文化によって正しきの規準の違っている事を具体的に知らせ、自分が今直面している情況の理由を理解させる事である。それによって自由な判断の予地が生れる。

留学生が直面する第一の問題は市中で人々から注視される事、時には子供達から英語ではやし立てられる事である。これは日本が島国で外国人に慣れていないから、という事で一応の説明はつく。しかし自分の感情だけを中心にして相手の気持を考えないという事は内心彼等がなかなか納得出来ない事のようにである。これはバスの乗車の際の我れ勝ち主義や子供の横暴、人々の迷惑を考えない街の騒音等と共に、日本人は礼儀正しい、という考えと大変矛盾する事として彼等が最初に不審に思う事のようにである。

これらは大変残念な事であるが日本の社会の現実であり、留学生は日々直面しなければならない事である。私達はこれらを無い事として隠す事は出来ないのであって、むしろこのような事実が存在する事をあらかじめよく知らせておいた方がよいようである。自ら覚悟していればそれに当面した時困惑する度合は少なくなるし、やがて自分の国にもこれを上まわる諸悪のある事を思い出して次第に慣れ許容するようになる。

7. 日本では極めてありふれた事で、そのため我々は無意識にその対応の仕方を心得ているのであるが、日本ではこちらの意志をきかれないまゝ茶菓その他が提拱される。又こちら

が「いらない」と言ったのに拱される事が多い。特に、いらない、と言ったのに拱される理由は外国人の中々理解出来ない事であって、時には自分がからかわれているのではないかと考える事もあるという。しかし日本人が自分の意志をはっきり表わさないで日本では「気をきかす」という事が美德とされているのだと説明すると、彼等は日本人が意志を表現したがる事に日常慣れているので、この間の事情は比較的よく理解し、彼等自身適当な対応の仕方を見ならって身につけて行くようである。

これらの心理的ショックとそれに対する説明と納得のいきさは池田摩耶子氏「日本語再発見」(三省堂)にくわしく、我々は留学生の扱いに関しこの御著書から多くの有益なヒントを得た事を感謝している。

8. これらを通じ、彼等自身で見聞する事実の裏付けと共に最終的に彼等が納得するのは、日本はグループ社会でお互いに知っている者同志は礼儀を以て接するが、それ以外の者はあたかも存在しないかのように振舞うという事である。
9. 自己の属する領域内では礼儀を重んずる、という説明に対して、必らず疑問として尋ねられるのは、日本の家庭内ではお互いに、特に子供が親に対して「ありがとう」や「すみません」を言わない事である。これはすべての留学生が経験して大変驚く事のようにである。欧米では親からさじ一本手渡されてもサンキューと言うように躰けられているわけであるから、自分が幼少時からきびしく躰けられた事がこゝでは行なわれていないのを見、又それ以外の場合での日本人の非常な礼儀正しさを見て、どう説明をつけてよいかわからないのだと思われる。

これに対しては日本語には「水くさい」という考え方があり、親しい間柄ではすべての事が暗黙の了承のうちにある、という事が説明として与えられよう。

10. 「家庭内で子供が親に対して乱暴な物の言い方をする、又時には親の言った言に対し知らん顔をして返事をしない事がある、オーストラリアではこんな事をすれば親から手厳しく叱られるが日本の親は何も言わないが」という事に対してAから説明を求められた事がある。さらにAによればオーストラリアには「おやじと息子の関係」というのがあって息子は母親には言わない事でも父親には腹をたち割って言って、父と息子との間には友達のような信頼関係があると言う。又我々が欧米で目撃する所では十代の息子でも母親に対してレディーに対するいたわり方と礼儀正しきで接し、無視して返事もしなかったり、親より権威があるように振舞うなどという事は思いもよらない事である。

私達は海外留学生の目撃する家庭内での子供と親との関係は本来の日本的なものではなく、ほんの一時的な日本の社会現象だと考えたいのである。

11. 又この他にも我々として思いもよらなかった事を疑問として尋ねられる事がある。日本で贈物のやり取りの頻繁な事は彼等がすぐに経験する事実であるが、よそからもらった物を隣の家にわけたりするのはどんな意味か、と尋ねられた事がある。日本には「おすそわけ」という考え方があるのだと言うと、「それは贈り主が自分のためにといって贈ってくれた意志に反し、好意を無視する事になるのではないか」と言う事であった。これに対して明確な解答は出せないが、これは少なくとも文化によって価値感に違いのある事を知らせ、又逆に我々が欧米に住む場合のよい参考となる事実である。
12. Dが次のような事実を2、3回人に語るのを聞いたが、これはDが余程口惜しく思った経験のようにである。「バスの中であるおばあさんに席を譲った所、横にいた他のおじいさ

んが出て来てその席に坐ってしまった」というのである。

恐らくこの老人2人は夫婦で、そうとすればおばさんは自分に譲られた席を夫に提拱したのであって、これは日本古来の夫婦のあり方に則った事であるから、日本という文化圏の中ではそれ自体非難されるべき事ではないであろう。しかしレディーファーストの文化圏に育ったDにとっては、これは理解を超える事であったであろうから、横から力づくで割り込んで来た、と目に写ったとしても仕方のない事であろう。

しかしもっと重要なのは、おばさんが自分に提拱された席を夫に譲る場合に、親切にも提拱してくれた人に対し礼を言うと同時に、「私の夫を坐らせたいので」と了承を求めるのが洋の東西、年令を問わない礼儀の基本という事である。

この老人は提拱者が日本人であっても、なすべき礼儀を省略してしまったであろうか。又は相手が外国人であるので一切のコミュニケーションは不可能だときめてしまったものだろうか。又は相手が外国人であるのでコミュニケーションは不必要だとも思ったのであろうか。彼女の国の人であったなら外国人の提拱者にその言葉は直接通じなくとも、自分の国の言葉で礼と断わりを伝える努力をし、その音調と表情によって相手は納得したであろう。彼女はこのような文化圏の出身なので上の一件で自分のせっかくの好意が無視されたと思ったのであろう。

「日本の生徒の方がよく勉強し、欧米では教育のレベルが低く、生徒は余暇を充分に楽しんでいる。」又は多くの日本人が外国人学生に対して必らず問題とするように、「制服のあるのは日本の学校だけである。」といった考えは現今の日本での通念であるが、果してこれは本当の事実であるだろうか。この判断に関して私達が一つだけ留意しなければならないのは、お互いに違った次元で比較して決論を出したり世界の一部の現象を一般的事柄と考えてはならないという事である。（オーストラリアでは始んどどの学校に制服があると言う。）

それはともあれ、欧米の規準から言って日本の高校は学校生活自体であれ、又先輩後輩と言った関係も、部活動も欧米より拘束が厳しいと言える。これはつまり欧米の青年が自由すぎて日本の学校の枠におさまらないのではないかという我々の危惧にも通じている。

競争原理に志向された日本の教育と、この個人に課せられた枠組みの強さから、一般に外国からの留学生は十代の日本人が一般的におとなしく受動的でかつ勤勉であるという印象を持つようである。しかし同時に彼等は日本の幼ない子供達が全く我がまゝに振舞い両親も社会もそれを当然の事と認めているのを見て、この対比が説明のできない矛盾と思うようである。しかしこれに対する解答は多くの学者も指摘するように比較的容易であり、欧米人は幼時にきびしく躰けられ、十代が進むに従って自主的判断にまかせられるようになるが、一方我が国においては幼時に自由に振舞う事を許され、その間判断の規準を自ら獲得しないまゝであるので十代に入ると統制的訓練をほどこして社会化をはかる、という事である。

外国人学生を我が国の学校に受け入れる場合には、上の事実が目に見えない一つの問題として横たわっている。あたかも違った方向を取る二つの文化の接点に立つようなもので、これは当の留学生と同時に、これを扱う学校と教師の問題となって来るが、これを上手に扱って対処するならば、困難よりも双方にとっての文化的利益となる事が多いと思われる。

私達は留学生が何の困難もなく新しい環境に適応する筈だと考えるのではなく、個々の事例

から彼等が直面するであろう問題を察知して、これに対して有効な指導をするならば、彼等は無駄な労力を費す事なく、比較的スムーズに自分の精力を新しい知識の吸収に向ける事ができる。又いろんな経験を自主的に取捨選択して自分にとって有意義なものを修得する事ができるであろう。

高校の留学生は日本についての初步の知識の修得の段階であるから、専門的な分野に深く入る事はないが、世界における日本研究の普及にともなうて、彼等の中の何人かがそのような専門の研究に入る可能性もあるし、又修得した日本語を通じて実業、外交、学問の分野において日本と関係した仕事に携わる可能性もあろう。

彼等が日本に学ぼうと期待するものは何であろうか。又私達が彼等に教え得るものは何であろうか。これはあまりにも複雑な問題で短時日の経験では答え得ない事柄である。日本には他の諸文化に比肩し得る独自の高い文化がある。これは日本人自身がよく理解していなければ自信を以て他に伝える事は出来ないであろう。

日本人はとかく日本料理は外国人には食べられない、とかいったたぐいに、日本の文化は他国人の理解し得ないものだと思い、これを学ぼうとする外国人を変った人とする傾向がある。しかし独自である、他と変っているという事は奇妙という事と同じではない。これは我々が他国の物事に接する場合でもあてはまる事である。

一見異った物事をそのありのまゝに認め、かつその底に内在する普遍性という事に気がついて初めて我々は諸外国の物や人に偏見なく接し、お互の理解と交流をはかる事ができる。どちらか一方を否定し、他方を絶対視してそちらに片寄ろうとする事がいわゆる「国際化」なのではない。

又私達は頭の中にこうある筈である日本文化の虚像をえがいて外国人に接してはならない。この虚像は第三者としての彼等は我々以上にたやすく見破ってしまうものである。茶の湯を日本文化の一つの代表として教える事は有意義な事であるけれども、同時に現代の日本人の多くが洋服を着、茶の湯と殆ど関係なしに生活している事実、又茶の湯がどのような経済的背景において行なわれているかという事もありのまゝに認めなければならない。

私達はとかくヨーロッパを古くさい伝統の国と見、それに引きかえ日本が進歩的な国であると考えたり、又逆に日本の伝統の面だけを実生活から取り出して強調しがちであるが、留学生の目に写る日本の姿は、新旧混合、日常生活にさえ見られるびっくりするような古さと同時に、世界のどこにも見られない程多くの自動販売機の林立した不自議な混合の姿としての日本である。私達はこの姿をありのまゝに彼等と共に認めそこから彼等に何を与え、教え得るかを考えなければならない。

そして最後に何より強調したい事は彼等にとっての日本在学が、彼等の一生において大きな貢献をなすように、国家という枠を起え一個の人間としての成長に役立つようなものでありたい。

KANAZAWA DAIGAKU KYŌIKU GAKUBU FUZOKU KŌTŌ GAKKŌ
(SENIOR HIGH SCHOOL ATTACHED TO THE FACULTY OF EDUCATION,
KANAZAWA UNIVERSITY)

Address: 1 Heiwamachi, Kanazawa, 921 Japan

Telephone: 0762(Kanazawa) 41-7441

Status: State-supported experimental upper secondary school
attached to the Faculty of Education of Kanazawa
University. Founded in 1947

Principal: A professor of the Faculty of Education, Kanazawa
University

Professor Shūkichi Komatsu

Deputy Principal: Mr Makoto Takase

Students: About 410 (295 boys and 115 girls) Ages 15 —18

Teaching Staff: 22 regular teachers and 6 part-time teachers

Medical Staff: 3 doctors, a dentist, a pharmacist and a nurse

Grades and Classes: 3 grades and 3 classes in each grade

Subjects taught and the grades in which they are taught:

Japanese, modern and classical (1,2,3)

Classical Chinese (1,2,3)

Ethics and Social Studies (1)

Politics and Economics (1,3)

Japanese History (2,3)

World History (2,3)

Geography (2,3)

Mathematics (1,2,3)

Physics (1,2,3)

Chemistry (2,3)

Biology (1)

Physical Education (1,2,3)

Kendō and Jūdō (1,2)

Health (1,2)

Music or Art or Calligraphy (1,2)

English (1,2,3)

Homemaking for Girls (1,2)

Extracurricular Activities:

Homeroom Meetings, Student Council Activities,
Team Activities (Hobbies and Recreations);
Club Activities (not compulsory)

Daily Schedule:

1st Period 8.45 — 9.35
2nd Period 9.45 — 10.35
Homeroom Meeting
3rd Period 10.50 — 11.40
4th Period 11.50 — 12.40
Lunches
5th Period 13.25 — 14.15
6th Period 14.25 — 15.15

School Calendar:

1st Term April 8 — July 20
2nd Term September 1 — December 24
3rd Term January 8 — March 24

Uniforms: Students are expected to wear uniforms when
they come to school

Researches by the teachers: Teachers make researches on
various aspects of education and their subjects
and publish annual periodicals

Student Teachers: We accept student teachers 3 times a year
for their teaching practice

Parents and Teachers Association: From time to time they
discuss education of the children

RULES AND SUGGESTIONS
TO AN EXCHANGE STUDENT

- 1 You will be a student experiencing school life in Japan, taking part in as many school activities as possible. According to the Ministry of Education you are not a regular student.
- 2 A student certificate which says you are a member of this school will be issued. A certificate for a bus commutation ticket will be issued, but not for the National Railways.
- 3 A Japanese student in an English-speaking country studies various subjects through English, but since you are not yet accustomed to Japanese itself, you are expected to learn Japanese and Japanese ways here.
- 4 If you are a Rotary exchange student, Rotary activities will be given priority. Experiencing something which is associated with Japanese culture outside school will also be given priority provided it does not infringe on your school life too much.
- 5 When you are to be absent from school either because of sickness or for some reason, please inform your councilor before school begins.
- 6 As a foreigner if you have to go to some official place during the school hour, please tell your councilor about it.
- 7 You are expected to wear a school uniform, which will be provided by the Rotary Club, if you are a Rotary student.
- 8 The students are expected to change their shoes when they come into the school building. If your indoor shoes are not fit for physical exercise, please have sports shoes on in the gym. And because of the condition of our playing-ground outdoor sports shoes are also needed.
- 9 No sports uniform is needed. If you are a boy you will decide which to learn, Judo or Kendo and then the clothes will be supplied by the Rotary Club.
- 10 You may be put into a class lower than your age justifies. That is because in that class we think you will be able to take part in most school activities.
- 11 An English teacher will be your councilor who takes care of you and responsible to you. You will be in a class in charge of a certain teacher and be treated as a member of the class.
- 12 If you are a Rotary student, textbooks and other teaching materials will be supplied by the Rotary Club through the school. The school fees including a student council membership and the fares for school trips will be paid by the Rotary Club. Stationery will not be supplied.

13 At the beginning of a term you will examine the class schedule and decide on your own schedule. (Perhaps after one week's sitting at lessons) You can drop one-third of the whole lessons.

During your own hours you will be given private tutoring by teachers, and when you are not given tutoring you are expected to study by yourself in the school library or to do some work which is equal to a class work.

14 Judo or Kendo are optional for a boy, and Japanese calligraphy, music or art are optional.

15 You may be invited to English lessons of other classes to help the teacher and the students. If the teacher in charge allows you can attend lessons of other classes in which you think you can manage with your knowledge of Japanese.

16 While you are at a class other than English, you are expected to;

- 1 listen to the lecture itself, or
- 2 try to learn Japanese through what is spoken, or
- 3 study Japanese or about Japan by yourself.

17 When a student is late for school he or she is to stand at the back of the classroom until the teacher allows him or her to take the seat.

18 No food or chewing gum is allowed in school except lunch.

19 You can stay away from school during the exam period, unless you like to take exams in some subjects.

20 You are expected to be on duty in turn for tidying and cleaning after school and at special occasions. But you are not expected to share shuban (weekly duty in turn) unless you volunteer.

21 You are not a regular member of the Student Council and have no right for voting in it. But you are welcome to share its activities.

22 The students are expected to join a club. At least one-hour club activity a week is compulsory. If you join a sport club you can take part in an unofficial game, but not in an official game.

23 The school swimming pool can be used during a certain period of the year after school. No student can swim alone.